

### 3. 創造農村ワークショップ in 多良木町

多良木町は九州島の真ん中、熊本県の南側、宮崎県や鹿児島県と接する「球磨」と呼ばれる盆地の東側にある。平成 27 年 4 月に人吉球磨地域で申請した「日本で最も豊かな隠れ里一人吉球磨」の物語が日本遺産に認定されたが、この物語の主人公である「相良氏」は、鎌倉時代初期から明治維新までの合計約 670 年間を同じ地域で領主として存続した武家で、日本の歴史上、大変珍しい存在である。多良木町はその物語の主人公、相良氏の発展の足掛かりとなった土地である。

日本遺産の構成文化財である「球磨焼酎」は、地理的表示規定（球磨焼酎の世界的な保護）と地域団体商標登録（地域ブランドの保護）を受けている。この球磨焼酎 PR イベントとして「七つの蔵の利き酒と味祭り」を開催している。また、多良木の文化を世界へ発信するために、球磨地域にしか伝承されていない“じゃんけん”の起源と考えられている球磨拳をキーワードに、球磨拳世界大会を毎年 10 月に開催している。

令和 2 年 7 月豪雨は、人吉球磨地域にも大きな被害を与えたが、多良木町では地域資源や文化財を活用した地方創生の取り組みを推進している。今回、創造農村ワークショップを開催し、多良木町における創造農村の取り組みを紹介するとともに、創造農村が抱える課題等について、基調講演や事例発表、パネルディスカッションを通じて、意見交換を行った。

|      |  |
|------|--|
| 日 時  | 令和 3 年 3 月 22 日（月）13:00～16:00  |
| 会 場  | オンライン（ZOOM）  |
| 主 催  | 多良木町   |
| 共 催  | 文化庁、創造都市ネットワーク日本   |
| 参加人数 | 23 人   |
| 次 第  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 開催地あいさつおよび多良木町取り組み紹介<br/>／吉瀬 浩一郎氏（多良木町長）</li> <li>・ 基調講演 「創造農村における創造人材の確保・育成」<br/>／大南 信也氏（NPO 法人グリーンバレー 理事）</li> <li>・ 多良木町の事例発表 <ul style="list-style-type: none"> <li>事例①「大人も子どもも楽しむまちの居場所『たらぎのあそびば』」<br/>／西 希氏（たらぎビジネスデザイン協議会 会長）</li> <li>事例②「創造的復興と日本遺産」<br/>／永井 孝宏氏（多良木町教育委員会教育振興課社会教育係 係長）</li> <li>事例③「今後のローカルを創造する」<br/>／明石 照久氏（一般財団法人たらぎまちづくり推進機構 代表理事）</li> <li>事例④「TARAKIYA プロジェクト—インクルーシブな社会の実現に向けて—」<br/>／久保田 貴紀氏（一般社団法人クロスロード 代表理事）</li> </ul> </li> <li>・ パネルディスカッション</li> <li>・ 講評<br/>／佐々木 雅幸氏（創造都市ネットワーク日本顧問）</li> </ul> |

## 【概要】

多良木町長からの開会挨拶後、NPO 法人グリーンバレー理事の大南氏より「創造農村における創造人材の確保・育成」と題した基調講演として、「創造的過疎」をテーマとしたこれまでの地域づくり、神山プロジェクトを説明した。

### （基調講演要旨）

アイデアではなく、先に人をつないでいくこと、その中で建築家やクリエイター、デザイナー、IT ベンチャー起業家等が「自生」すること、定住人口だけでなく一定期間滞在する関係人口を作っていくことが重要である。また、「すき」な場所を「す“て”き」な場所に変えるため、身の回りの小さな事柄から「て」を加えていくことが大切だ。

次に多良木町内で取り組んでいる創造農村の4事例について紹介した後、大南氏、(一財)たらぎまちづくり推進機構の明石氏、CCNJ 顧問の佐々木氏、モデレーターとして多良木町永井氏によるパネルディスカッションを行った。

### （パネルディスカッション要旨）

神山町は他所から見ると成功したように見え、計画的に取り組んできたように見えるが、実際には日々模索の連続で、小さな問題を一つ一つ解決して取り組んできた結果である。これだけ世の中が変化する時代において、今は役に立たないことにも投資していくことが重要である。

他所から羨望の目で見られる地域資源があるだけでは価値がない。新たな視点を加えて新たな伝統を作れるかが大切だ。そのとき、国内ではなく世界を向くことも考える必要がある。

最後に CCNJ 顧問の佐々木氏が講評を行った。

### （講評要旨）

多良木町が創造農村に取り組むために、移住者や若者などが持ち込む新しい文化なども「文化の多様性」として受け入れることが、創造的なコミュニティにつながっていく。



創造農村ワークショップの様子